

学位論文要旨

日本と中国に見る保育者のかかわりの違いに関する  
研究

— 幼児間のトラブルに着目して —

広島大学大学院教育学研究科  
教育学習科学専攻 教育学分野

学生番号 D161179 氏名 陳林奇

## 序章. 問題の所在と研究方法

保育者による幼児への指導として幼児間の問題解決行動がある。その問題解決の様式は保育者それぞれによって固有な問題解決のアプローチがある(梶田, 1986)。そのため、これまでの保育者のかかわりに影響をもたらした要因をめぐる諸研究では、保育者の経験年数からの影響(梶田ら, 1985,)、所属園の属性からの影響(藤木ら, 2011)、および学歴からの影響(三国ら, 2013)が、それぞれ指摘されている。しかしそれらの研究のほとんどは、同じ文化的背景における保育者間の比較に限定されており、異なる文化的背景を持つ保育者を対象とした研究は僅かであった。異なる文化的背景を持つ者たちが違う行動原理に基づいて行動する(岩田, 2017)ことから、保育者のかかわりの差異について、異なる文化的背景を持つ保育者を対象とした研究が求められるといえる。そのため、日本と中国を比較することで、それぞれの固有のかかわりが浮き上がるのではないかと期待される。

今日、中国の幼稚園では、保育者の日々の保育活動は、幼児が自由に遊ぶ時間はほとんどなく、保育者にコントロールされていることはよく知られているが(王, 2010)、保育者は幼児間のトラブルに対応する際は、わが子がトラブルに巻き込まれた保護者が、幼稚園の保育者にクレームをつけに来ることが少なくない(劉ら, 2013)。したがって、トラブル1に対する保育者のかかわりが、日本と中国では大きく異なると考えられる。

以上のことを踏まえ、本研究の目的は、日本の保育者と中国の保育者それぞれの幼児間のトラブル場面におけるかかわりの特徴を明らかにすること、及びその特徴について日中両文化の比較から考察を試みることである。

Tobin ら(1989, 2009)は質的研究法を用いて、保育者のかかわり方に「介入」と「介入せず様子を見る」があることを明らかにしている。本研究の1つ目の課題である「保育者の幼児間のトラブルへの『介入』をより細かく分けると、どのようなかかわり方が出てくるのか」は、Tobin らの結果を批判的に捉える視点から提出したため、解決するには異なる研究方法が求められる。従って、アンケート調査を行った。また、保育者のかかわりがトラブル後における幼児の集団形成に与える影響、及びかかわりのプロセスを解明するため、幼児のトラブルの詳細を捉えると同時に、保育者のかかわりを受けてのトラブル当事者たちがその後どのような行動をとるかというプロセスを見ていく必要性から、本研究ではエピソード記述と保育者を対象とするインタビュー調査を用いた。

### 第1章 保育者の幼児間のトラブルへのかかわり方

本章では、アンケート調査におけるかかわり方に関する35項目の因子構造を検討するために、因子分析を実施した。結果として、日中に共通して3つのかかわり方のパターンが得られた。そ

のうちの2つのパターンは日本と中国に共通している。1つは、保育者が子どもにトラブル行為を認識させるために、トラブルがもたらした影響を子どもが考えるように促す傾向にあり、「認識の促し」というかかわり方パターンであった。もう1つは、保育者がトラブルを幼児間の遊びの一つとして捉えるか、子どもが自分たちで解決できると考える傾向にあり、「介入せず様子を見る」というかかわり方パターンであった。日本と中国とで異なるパターンについては、日本の場合は、保育者が子どもをトラブル行為から他の遊びへ誘導しようとし、トラブル行為に言及しない傾向にあり、「遊びの支援」というかかわり方パターンが確認されている。中国の場合は、保育者がトラブル行為を他の保育活動に替える傾向にあり、トラブル当事者への軽い懲戒を伴う「行為の修正」というかかわり方パターンが認められた。また、日本の保育者は、保育経験年数を重ねるにつれ、乱暴なタイプの子どものトラブルにおいては、「認識の促し」に時に応じて「遊びの支援」を加え、柔軟な態度を取る傾向にあるのに対して、中国の保育者は、「認識の促し」を用いる頻度が低くなり、かわりに「行為の修正」を用いる頻度が高くなる傾向にあることが示された。

つまり、保育者の幼児間のトラブルへのかかわり方において、日本の保育者の特徴は「遊びの支援」といった関わり方のパターンがあること、中国の保育者の特徴は「行為の修正」といった関わり方のパターンがあることである。

その特徴の違いは、保育者の考え方にかかわると考えられる。とりわけ、日本では、幼児間のトラブルに接する際に幼児間の関係を重視する保育者が多い。例えば、気持ちを和ませる介入行動で当事者間の良好な関係を維持しようとする保育者（水津ら，2015）や仲間集団間の遊びが壊れないように支えようとする保育者（友定，2009）などがある。このような保育環境における保育者が「遊びの支援」といった関わり方のパターンを通して、幼児にトラブルで傷ついた関係を修復させることが予想される。だが、中国の保育者の多くは、トラブルで傷ついた関係はしばしば自然に修復すると考えている（徐，2016）。それに加えて、幼児への矯正教育が幼児の行為認知力の向上に効果があると考えていると思われる（黄，2007，陳ら，2019）。そのため、中国の保育者は「行為の修正」といった関わり方のパターンでトラブルに対応する可能性があると考えられる。

## 第2章 保育者のかかわりのプロセス

本章では「介入」を時系列に沿って「トラブル時介入」と「トラブル後介入」に分け、日中の保育者それぞれのかかわりのプロセスを分析した。具体的には、日中の保育者が幼児間のトラブルにおいて、それぞれどのような場合に、「介入せず様子を見る」、「トラブル時介入」、「トラブル後介入」を行うのかを分析する。研究方法としては、エピソード分析とインタビュー法を用いた。その結果は以下ようになった。

日本の保育者は、子どもたちにトラブルの解決を任せるためか、または仲間集団間の遊びが壊

れないように見守っていき、子どもが自分たちで解決できると思わなかったら、トラブル時介入を行い、トラブル時介入によって解決できず、且つ子どもが自分たちで解決できないと判断した場合には、トラブル後介入を行った。一方、中国の保育者の場合は、小さなトラブルに気づいた場合は、介入せず様子を見ていき、大きなトラブルに気づいた場合は、トラブル時介入を行った。また、トラブル時介入によって当事者間の関係性を元に戻せたかどうかにもかかわらず、トラブル後介入は行わなかった。トラブル後介入は、保護者に注意されたトラブルに対して行われたことが示された。

日中保育者のかかわりのプロセスにおける一番大きな違いは、トラブル後介入を行う意図の違いである。日本の保育者がトラブル後介入を行う目的は、トラブル時介入によって当事者間の関係性を元に戻せなかった場合に、関係を修復しようとすることである。中国の場合は、保護者に注意されたトラブルのみをうまく対処しようとするためである。このような違いは、保護者からの影響に左右されると考えられる。とりわけ、中国の保育者はトラブルにかかわる際、保護者から影響を受けやすいという特徴がある。日本の保護者とは違い、中国の保護者の多くは幼稚園を子どもに学習のよいスタートの機会を与える場所と認識し（唐澤，2006）、学習を邪魔するトラブルを不正常的な現象として捉え（華，2004）、わが子がトラブルに巻き込まれた場合に幼稚園の保育者にクレームをつけに行き、保育者のかかわり方に影響を与える（劉・倉持，2013）。

### 第3章 トラブル後における保育者のかかわりによる子どもの集団形成への影響

本章では、日中それぞれの保育者のかかわりがトラブル後における子どもの集団形成に与える影響を分析した。研究方法は第3章と同じであり、エピソード分析とインタビューを用いた。

日本の保育者は、トラブルで仲間集団が崩壊した際、トラブル当事者たちが同一場所で遊べることを促すために、直接トラブル当事者たちに話かけたりするかかわりを行い、トラブル当事者たちが同一場所で一緒に遊ぶことができるようになったことに気づいた後、当事者たちに主体的に仲間関係を再形成させるために、子どもたちの遊びに直接にかかわらず、そばで介入せず様子を見るが多かった。それに対し、中国の保育者、トラブルで仲間関係が悪くなったトラブル当事者たちに対しては、相手と握手を交わさせ、次の小集団の保育活動で同じチームに割り当てるといのかかわりを通して、仲間集団の再形成を促そうとすることがあった。一方、もとの仲間集団が再形成されそうにない場合は、トラブル当事者たちにそれぞれの新しい仲間集団が形成できる環境を作るという結果が得られた。

以上の結果から、保育者が行う集団づくりのあり方における違いが見られた。日本の保育者と比べると、中国の保育者は支配的な集団づくりを行うという特徴を持つ。その理由として考えられるのは、中国の保育者は伝統教育の観念から影響を受け、子どもの教育問題において外部の力で子どもをコントロールする必要があると考えているためである（董，2012）。日本の場合は、近

年，保育者による幼児集団づくりを巡って，管理的な集団づくりを批判し，幼児の自発性を尊重する「関係論的視点」から捉えることの重要性が言及されている（諸岡，2006）。

#### 第4章 かかわり方のパターンと保育指導観との関連性

本章ではアンケート調査の結果に基づいて，日中それぞれの保育者のかかわり方のパターンと保育指導観との関連性を検証した。

結果的に日本の保育者の保育指導観は「過程重視」・「子ども中心」・「まとまり重視」・「男女平等」タイプであった。事例に関わらず，保育指導観が「子ども中心」タイプである保育者は遊びの支援という関わり方パターンを用いやすいことが示された。また，保育指導観が「まとまり重視」タイプである保育者は乱暴なタイプのトラブルにおいては，認識の促しという関わり方パターンを用いやすいことが明らかになった。さらに，保育指導観が「男女平等」タイプである保育者は女子仲間集団間のトラブルにおいては，介入せず様子を見るという関わり方パターンを用いやすいと考えられた。

中国の保育者の保育指導観は「子ども中心」・「成果重視」・「男女平等」タイプであった。保育指導観が「子ども中心」タイプであれば，保育者は事例2と事例3において「行為の修正」を用いにくかった。それに反して，保育指導観のタイプが「成果重視」である保育者は，事例1のような乱暴なタイプのトラブルに対しては，「行為の修正」を用いやすいことが明らかになった。

以上のように，日本の保育者の特徴は，同性の仲間集団間のトラブルに「男女平等」といったタイプの保育指導観が影響を与えていた。麻生（2008）は，年長児の女の子は仲間はずれを作りやすいと述べている。このことに鑑みれば，子どもの性別に合った指導をする保育者は，女子仲間集団間のトラブルにおいては，認識の促しを活かして子どもにトラブルを認識させることを通して，トラブルが仲間はずれにエスカレートすることを防止することが予測できる。

#### 終章 総合考察

本章では，これまでの結果を総括し，本研究の成果を述べる。その上で，課題について提示する。日本と中国に見た保育者の幼児間のトラブルへのかかわりの違いをまとめると以下の4点になる。

第1に，日中保育者の幼児間のトラブルへのかかわり方における違いである。本研究と先行研究との大きな違いは，本研究では日本の保育者であれ中国の保育者であれ，トラブルへのかかわり方が単なる1つのパターンだけでないことを明らかにした点にある。Tobinらの研究(Tobin, Wu & Davidson, 1989, Tobin, Hsueh & Karasawa, 2009)では，実際の保育場面で録画したトラブル場面の映像を保育者に見せ，トラブルに対するかかわり方を尋ねるといった研究方法により，日本の保育所で友達にけんかをしかけた子どもに対し，日本の保育者は自分で間違いがわかるまで待と

うとするが、それは中国の保育者からみると保育者の責任を果たしていないと理解されるということが明らかにされている。つまり、日本の保育者のかかわり方は介入せず様子を見ることであり、中国の保育者のかかわり方は介入することである。それに対し、本研究では、トラブル事例の属性が変われば、日本の保育者は介入することがあり、中国の保育者は介入せず様子を見ることを明らかにした。また、介入することを2つのかかわり方のパターンに細分することができ、トラブルの属性と保育者の経験年数によって用いられるかかわり方のパターンが大きく異なることも示された。これらの結果は本研究のオリジナリティと言える。

第2に、日中保育者のかかわりのプロセスにおける違いである。日本の保育者がトラブル後介入を行う目的は、トラブル時介入によって当事者間の関係性を元に戻せなかった場合に、関係を修復しようとすることである。中国の場合は、保護者に注意されたトラブルのみをうまく解決しようとするのである。

第3に、トラブル後に保育者が行う集団づくりのあり方における違いである。日本の保育者と比べると、中国の保育者は支配的な集団づくりを行うという特徴を持っている。

第4に、保育指導観によるかかわり方パターンへの影響における違いである。日本と違い、中国の保育者にとっては、保育指導観からの影響が「行為の修正」というかかわり方パターンだけに集中しており、その影響については、トラブルの種類が変わると逆の効果が現れる可能性がある。

本研究では、トラブルへの保育者のかかわりに注目し、そうした実践がトラブル後における幼児の集団形成にどのような意味や影響をもたらしているのかについて検討した。一方、本研究で取り上げたエピソードを分析することにより、保育者だけでなく、トラブル当事者以外の幼児もトラブル当事者間との関係性が元に戻れるように介入行動を行うことがあるということが明らかになった。しかし、トラブル当事者以外の幼児のトラブルへの反応がトラブル当事者たちの仲間関係の回復にポジティブな影響を与えるかどうかという問題に関して、本研究ではさらなる詳細な検討は難しい。この点が本研究の限界であり、今後の課題である。